

松本亦太郎博士の心理学

——世界心理学史論考その一——

佐 藤 幸 治

1. 展 望

明治初期における西洋心理学の導入の特色は、他の植民地化されたアジア諸国と異り、広く米欧にわたって米・英・仏・独・デンマーク等の心理学書が訳出されたことである。日本心理学界の先駆的指導者元良勇次郎、松本亦太郎両博士はともに初め同志社英学校に学んだが、元良博士は米国に留学して心理学関係の東大出身でない唯一の東大教授となり、在職22年にして、大正元年（1912）逝去、松本博士は一高、東大のコースをとり、米独に留学し、（東京）高師、京大、東大教授を歴任し、（在職通年25年）、ひきつづき日本女子大教授となり、また日本心理学会会長として元良博士歿後、30年にわたって日本心理学界の大御所的存在を続けた。

元良博士は最初は東大の精神物理学の講師であり、教授としても実験心理学に深い関心を寄せた実証主義者であるが、一面、体系的思想家であると共に東洋思想に深い関心をもち、1895年頃の修禅体験に基づいた1905年ローマにおいて開催された第五回万国心理学会議で発表した自我と心に関する見解のごときは、まさに同時代の Würzburg 学派の考えとも対比さるべきものであった。

これに対し松本博士の“精神的動作”は大正3年（1914）に出版されており、ゲントルト心理学（大正元年，1912）、及び行動主義（大正2年，1913）と並ぶ新しい心理学の提唱であったといえる。（このような東西対応は、第二次大戦中における我々の人間総合科学の提唱と米国における集団力学などの勃興との間にも見られる。）松本博士は大戦末期、鎌倉で逝去したが、一年半後、終戦の前に同じ鎌倉で逝去した哲学者西田幾多郎博士の場合、多くの弟子たちがその思い出を語り、哲学、思想や、その発展を論じたのに対して、松本博士の場合は、生前は記念論文集等が3回も公刊されたに拘らず、その逝去に関する記事がその長く主宰した“心理学研究”にも死後20年にわたって1行の記載もなく、漸く昭和40年（1965）生誕百年に際して関西心理学会がこれを取りあげ、2年後今年日本心理学会がとりあげるに至ったことの対照が極めて印象的である。

2. 精神動作学

松本博士の心理学の立場は大正3年に公刊された“精神的動作”において一おう提唱され、その成果と展開は大正14年の“智能心理学”に概観することができる。私は前述のごとく、この精神動作学¹⁾は、Gestaltpsychologie, Behaviorism と時を同じくする、心理学における新しい運動

1) “精神的動作”（大3）においては精神的動作学の言葉を使っているが、“心理学史”（昭12）においては“精神動作学”といっている。

の一つと見るのである。博士自身も後に「東西兩大学に於て最初に学習した実験的研究法はライプツヒ系統のものであるが、直接のモデルになったのはスクリプチュアや、ティッチナーの具体化した研究法であった、之にクレペリン一派の研究法及びホイップルの精神検査法が加へられた。実験的条件内に於ける知覚の内観的研究や、精神の働きを待つて現る意志的動作や、智的作業を成る可く数量的に考察するを主眼とした。私は精神動作学の出来を予想していたが（拙著精神的動作）、後に同様の研究は米国で行動学なる名の下に包括された。大正2年に東京帝国大学に還ってからは、私は更に英国のゴールトン、ピーアスン、スピーアマンの生物測定学の研究法に留意し、精神的作業の相関測定法を導入する事に努力した。（心理学史 p.432）」と述べている。私は“精神的動作”に遡って当時における博士の抱負を見ようと思う。

「心理学の研究は内観に俟たねばならぬ、併し今日は内観の意義を新にする必要がある。我々は最早受動的に心内現象を観察して満足して居る事は出来ぬ。心現象に関し従来心理学が有するより一層明確なる知識を得んと欲せば、一定の目的に従ひ心現象を変化せしめ、且此変化を客観的に記録する途に出でなければならない。此内観たる決して単純なる内観にあらず、客観的の制約と記録との助を借りて成立する一種新なる内観法である。

従来内観の心理学は自己の心内に起る現象は即ち亦何人の心にも起る現象であって、自己の心内現象を観察分解すれば一般に人間の心内現象を明にする事が出来るとの見地に立って居た。併し自己の心内に起る現象を以て直に普遍性あるものと認めて可なるやは疑問である。最近に於ては多くの人の心に起る所を考証した上で普遍性ある心作用の如何なるものなるかを明かにせんとし、自己の心作用を其考証中の一要素と見る態度の研究が漸次に盛になって来た。心理学の一新方面である民族心理学などは此態度を最も明白に示し、諸時代、諸民族の間に現出せる客観的事象を相互交渉干渉せしめて精神の躍動して行く状を説明せんと努力して居る。更に従来内観の心理学が自己心内具体的経験の普遍性を信じて居た根拠は何処にあるかと云えば、畢竟するに客観現象の一致に帰着するようである。自己の心に起る純主観的の意識現象の客観化した所を見ると、他の人が同じ場合に遭遇した時現はす客観的動作と一致して居る所がある。此客観の一致が根拠となり自己の心内現象の普遍性を信ずるに至ったのではあるまいか。若し然りとすれば心現象の普遍性を定むるために身体現象を研究する必要も起って来る。要するに心理学は漸く客観的の学問の色彩を帯ぶるに至った。

更に進んで考ふれば意識現象は夫れ自身独立の領域を有し、一の意識現象は他の意識現象を以て十分に説明し了るを得るものなるや否やに就て疑問が起る。意識現象は生理現象と相関し相錯綜して人間の活動を成立せしめ、経験上より見れば生理作用に制約されて居る意識の内容なり形式なりがあり、又意識作用に規定されて居る生理作用の形式がある。要するに意識作用は人間活動の一部面にして、其部面を生理的部面と全く分離せしむるは余りに人為的であるのみならず、然かしては決して意識の真相を明にする事は出来ない。意識の部面より見て十分に了解し得ざる所は生理作用の方から考察して見ねばならぬ。尤も精神と身体とを因果系統に一括して見るを得るや否やは遽に決するを得ざる問題であるが、精神作用の生理的条件の研究は前者の性質を明にするに欠く可らざる事である。加之意志的に起発したる外部動作進行の径路は意識中には却て不分明にして、内観により其径路を確実に認識する事は出来ない、其動作を客観的に描録し考察するに至って始めて其動作を構成せしめて居る諸要素を明にする事が出来る。単に意志動作のみならず、認識や感情の生理的表出を客観的に研究する事が夫等意識現象を明瞭にする補助になる。

（仮名使い等、原文のまま）

本文中にも精神的動作学独立の必要の項で次のように述べている。

京都大学教育学部紀要 XIV

1865	慶応元	9月15日 高崎		
68	明治元			
1870	〃 3			
1875	〃 8			
79	〃 12	松本家に入る		
1880	〃 13			
82	〃 15	同志社英学校	京都	
1885	〃 18	京都府立中学校 才一高等学校	4年	
1890	〃 23	帝国大学入学	東京	
93	〃 26	〃 卒業 大学院入学 (6年間)	7年+3年 : 10年	
1895	〃 28		外遊	
96	〃 29	Yale Univ.	4年	
98	〃 31	Univ. Leipzig		
99	〃 32	東京帝国大学大学院卒業・文学博士	東京	
1900	〃 33	高等師範学校教授	6年	
1905	〃 38			
06	〃 39	京都帝国大学教授	京都	
1910	〃 43	京都市立絵画専門学校校長兼美術工芸学校校長	7年	
11	〃 44	同志社女子大学準備委員長・理事		
13	大正2	東京帝国大学教授		大・3 精神的動作十講 (1914)
1915	〃 4	日本女子大学教授嘱託	(欧米出張)	大・6 渡り鳥日記
1920	〃 9	航空研究所嘱託		大・12 心理学講話
21	〃 10	帝国学士院会員		大・14 智能心理学 (1925)
1925	〃 14			大・15 絵画鑑賞の心理
26	昭和元	東大停年退職・日本大学講師	東京	
27	〃 2	日本心理学会長		昭・5 諸民族の芸術 ○ 心理学及芸術の研究 ○ 古稀記念論文集
1930	〃 5	東京文理科大学講師		昭・12 心理学史 (1937)
1935	〃 10			昭・14 遊学行旅の記
41	〃 16			
43	〃 18	逝去 (昭 18・12・24)		○ 心理学新研究

第1図 松本亦太郎博士の生涯

「精神的動作は主に眼の運動、発声機関の運動、上肢の運動より構成される。」このようなものは一種特別の学問の内容となるべきものではあるまいか。「この動作は生理学本領域は心理学本領に属せぬとす

れば、どうしても之を取扱う一つの新学問が発達し、かかる動作を測定し、その動作の形相なり法則なりを研究せねばならぬ。余はかかる新学問を仮に精神的動作学と名けるのである。実験的研究は単に内観的心理学を進歩せしむるのみならず、一方において精神動作学の産出を促して居る。否な実験的研究法の大なる効力はむしろこの新学問の範囲において顕わるものであるまいかと思われる。それは実験的研究法の一特色は客観的測定ということにあって、動作の測定のごときは実験的研究法がその特色を発揮するに最も都合好き事項であるからである。」

松本博士は当時、精神動作学を本来の心理学にも本来の生理学にも属せぬ第三の科学として考えていた。ワトソンが行動主義こそ、本来の心理学であると主張したほどの派手さはなかった。博士が精神的動作として例示しているものは、眼球の動作、指手腕の動作、動作の練習、発声機関の動作から反応作用、感情の表出、疲労現象などであり、英語では精神的動作学を *Psychocinematics* と呼んではどうかといっている。

この視野における大正5、6年、即ち第一次大戦末期に至るまでの博士門下の研究としては、東大、京大にわたって次のようなものが挙げられている。（心理学史p.432—433）

田中寛一氏の精神的作動の研究、檜崎浅太郎氏の手力学的研究、富田精氏の左利と右利の研究、榎保三郎氏の学校生徒の疲労の研究、佐久間鼎氏の日本語の音声的研究、千輪浩氏の精神的作業の練習の研究、城戸幡太郎氏の書及書方の研究、増田惟茂氏の書方の分解的研究、村瀬雄平氏の日本人の智能の遺伝の研究、古賀行義氏の学業成績間の相関の研究、寺沢巖男氏の動作に影響を及ぼす内外諸条件の研究、黒田源次氏の感情の表出の研究、桐原葆見氏の工場作業に関する心理学的研究等。

以上のうち富田、佐久間、千輪、城戸、村瀬、古賀氏等の研究は大正6—7年頃“心理叢書”の夫々一冊として公刊されており、叢書の続刊、松尾長造氏の“読み方の心理的研究”、高木貞二氏の“律的動作の研究”等も、精神動作学の領域の研究に外ならない。

松本博士の第二作“実験心理学十講”も大正3年（1914）の公刊で、この二作とも東大に移った直後発行されたが、“精神的動作”の序に千葉胤成、有馬（後の黒田）源次両氏の助力への謝意が表明されていることによっても明らかなように、1906年から1912年における京都時代の業績と見てよい。まさにゲシュタルト心理学や行動主義の擡頭と時を同じくするのである。

3. 智能心理学

大正14年（1925）の末、東大停年退職の直前公けにした“智能心理学”約一千頁は高等師範学校、京都帝国大学、東京帝国大学の明治33年（1900）以降約四半世紀にわたる、博士を中心とする精神動作学の流れを汲む研究の集約であり、松本博士東大退官に当り、松本亦太郎博士在職25年記念論文集として編集され昭和6年に発刊された“心理学及芸術の研究”上下二巻二千余頁は、博士の門下友人の、必ずしも精神動作学、智能心理学の領域に限らない、広汎な範囲の論文の集積であった。

“智能心理学”著作の立場はその“序”においてよりも、“心理学史”における博士自身の説明によって一層明らかになると思う。

「私の考えているのは精神身体的存在者たる人間其者であるが、科学的考察の対象とするに最も好都合なのは智能に関する方面であるから、それを此書の叙説の主題としたが、時としては他の精神的機能にも説き及んでいる。意識に現れる機能の方面から人間を観ただけで満足ができないで、時には身体現象の方も考察したが生理学の範囲には立入っていない。身体現象を統計的に観察したのである。

近代経験派の智能に関する考察が重を置いた点や、明にした方面を論じたが、私は二つの異なる心理学的考察法のある事を明に認めた。其一は学者が唯自己の意識を内省し、総ての人間の心の働も亦其如きものと断ずる考察法である。今これを仮に独裁的考察法と呼ぶ。他は多人数の心の働を考察し、最頻出現の状を正常状態とし、それより出現頻数の少い状態を趣異と認め、そういう見地から心の働きを明にする、これを仮に集成的考察法と名ける。近代においても比較的旧い時には独裁法により智能を考察したが、最近においては集成法が頗る盛になった。多人数の心の働に発言権を与えるのであって、デモクラティックの考察法である。私が『智能心理学』において説述したところは主に所謂集成法とこれにより攻究し得た結果とであって、曾て独裁的考察により推断した先験観念や範疇の如きものも集成法により之を考え直す事の可能な事を自ら明ならしめんとした。

心の集成的考察法には心理現象或は心的所産の量的考察法が包含されている。心の量的考察に就て私は自家の見解を論述せざるを得なかった。」

「心の働を量とすればその量は常恆的の量では無く趣異的の量であると云う事を心理学者は意識するに至り、物理学的測定とは趣を異にする量的考察法を案出した。それは即ち品等法と品等法を基礎とする相関測定法とである。精神検査法などは其形の種々なるに拘らず矢張品等法に属する。是等両考察法は統計的研究法であるが、通例統計なる語により了解される如き単純のものでない。是等統計的研究法は一方において実験的測定及考察を含蓄している。而して亦其考察に主観的評価を大に参酌し、現象の序列に重きを置きこれを量的に表示する。又一方において数学的思考を多大に用いる、而して一現象と他現象との相関を係数により示す。(中略)要するに品等法及相関法を検討すれば、従来の心理学及実験心理学にて用いたる諸研究法及其結果を陶冶統合するに足る性質を具えている。而して序数を用うる量的考察法は心理学の領域において前途甚だ有望である。

智能の集成的考察法は分解の方向に於ては特殊智能を他と分離して攻究し、総合の方向に於ては根本智能(一般智能)を探索しているが、相関係数を測りて、特殊智能間の関係度を定めたり、其関係を辿りて所謂智能の考に到達したりする如き研究法は独裁的考察法の夢想しなかった道筋で、然る研究法に由って得た知識は吾々には新鮮であって興味の深いものである。私は是等を智能の横断面的角度から眺めた。而して心理学にも古来踏み慣した道の外に開発する可き新道の少くない事をつくづく合点して叙説を進めた。

個々人の智能には種々優劣の段階のある事が明になって見ると智能の卓越なる人間が何うして出現するか、諸国土諸時代に絶群人、拔群人が出現する状況が如何になっているか、又現今の文化社会に於て智能の優良なる人間の消長が何うなっているかというような問題を攻究しない訳にいかぬ。是等は家や国の盛衰、延いては文化の発展に重大なる関係をもっている。私は智能の縦断面的相関の見地からは是等の現象に対する考察を遂げた。偉人の研究や、同胞智能の研究や、民族優生の研究は心理学の重要な分野の一つになって来た。

又智的機能は種々なる条件に制約されて動く、条件の影響から抽象して智能を見る事も可いが、条件と智的機能の関係の研究を欠いてはならない。独裁的心理学では此種の研究を不問に附して顧みなかった。又智的機能は継続なる条件により種々に変化し、練習及び疲労の現象を生ずる。夫等に関する最近の諸研究に就て私は洞察を試みた。

夫から年齢と環境とは智的機能に影響を及ぼす最重要なる条件である。年齢に関しては先ず重要諸期に於ける生命の消長を調べ、更に進んで少年期青年期における特殊智能及一般智能が如何なる段階に位置を

占むるやについて最近の研究の結果を述べ、それから高年と精神活動との関係を探し種々なる方面から材料を蒐むる事を努めた。而して六十歳乃至八十歳間の人間の智能活動の問題は甚だ興味あるもので、及ぶだけこれを取扱って見た。

環境中で従来の心理学が曾て研究しなかったのは高空と智的活動の関係であった。高空における生理機能も従来研究が乏しかった。私は富士山や其他の高山における研究と、模倣高空内の智的活動に就て最近の業績を概括した。これは独裁心理学では見当のつかない心理学の新領域である。更に高温や都会生活が智的活動に及ぼす影響も其代表的のものを説述した。

独裁的考察法より得た心理学体系は言わば天才の心理学であって、ゴシック式寺院建築が美的欲求に満足を与える如く吾人の抽象的の高い理智の憧憬に満足を与えるが、実用とは大に懸隔している。集成的考察法から得た心理学の知識は常人的心理学であって、鉄筋コンクリート式の建造物が非美術的なにも拘らず頗る実用に適する如くに耐久性があり、且厚生的であって人生の諸活動を整理し、これを有効化する力を有っている。この常人的心理学の見地から諸方面に渉る能率の心理的研究が興り、又世界大戦以後は軍事上における心理学の応用問題が盛に研究された。実社会の活動が心理学に援助、指導を求むるに至ったのは心理学が合議的考察の上に立つに至った為である。現時の心理学が実生活の諸方面と結合するに至った消息を私はやや審に説いた。

私の書いた様な心理学の傾向の発生に対し花床になっている欧米の心理学界の消息を窺う為に現代心理学の趨勢と指導の心理学者の貢献を説述した。要するに最近の心理学が新領土開拓の第一線より獲来った所のものを代表的に論述するのが私の狙った所であった。」（仮名使い等、新カナ使いに書き換えた。）

松本博士の心理学は広い意味での“行動学”であったが、新行動主義に連なるような基礎心理学を中心とするものではなく、むしろ実験応用心理学といってもよいものであった。

4. 松本心理学の焦点と盲点

“心理学及芸術の研究”は松本博士門下の心理学的研究の多様性を見る上に興味深いものがある。松本心理学の中心的な領域における論文は、千輪浩、青木誠四郎、巢山菊二、武政太郎、桐原葆見、今田恵（ゴッダード木型板作業の時間的分析）、淡路円治郎、寺沢厳男諸氏の学習、練習関係のもの、古賀行義、浜中浜太郎氏らの智能、性能関係のもの、桑田芳蔵、檜崎浅太郎氏らの発達関係のもの、久保良英、橘寛勝、高良富子氏らの高年者の研究、松井三雄、田中寛一、渡辺徹、岡部弥太郎氏らの人格測定に関するもの、内田勇三郎、中村隆治、石井俊瑞、小熊虎之助氏らの病理、犯罪心理学に関するもの、その他、増田幸一氏（産業心理学）、小保内虎夫（双生児）氏らの研究等を含めて、心理学関係37篇中25篇に上っている。

松本博士は日本心理学会の会長を創立以来逝去まで16年勤められたが、“心理学論文集(四)”即ち日本心理学会第4回大会報告の“序”に、日本の心理学徒として反省すべき点として次の3点を指摘しておられる。

その第一は、一の専攻者が往々他の専攻者の業績を知らないで研究を重複し、或は研究方面の分担が意識的に行われないうで、全体の研究能力の経済的統制が十分でない趣があること。第二は、発問法、検査法等の如き集団法による考察の広く行われるに對し、実験による精密なる研究の行われることが比較的に少くして、研究所の施設が十分に活用されていない趣があること。第三に、欧米における新しい学説や態度の導入を急いで、学説、態度の史的評価と事實的検討とに努

力することの足らざる趣があるということである。博士の心理学には、何といても実験の筋金に通っているのである。“心理学及芸術の研究”にも黒田源次、増田惟茂、西徳道、高木貞二、小野島右左雄氏等の知覚、感覚の問題に関する論文があり、入谷智定、桑田芳蔵氏の民族心理学的研究等も博士の関心を離れるものではなかった。

私がかねてから高山岩男氏に西田幾多郎博士が「松本にはほんとうの心理学が判らなかつた、元良という人は別だが」といわれたことがあったということを聞き興味深く思っていたが、本年（昭和42年）夏の日本心理学会第31日大学のシンポジウム“日本心理学の回顧と展望”，松本亦太郎博士生誕百年によせて、に参加を求められ、博士の“心理学史”をいささか念入りに検討するに及んで、博士の関心における注目すべき盲点に気づかせらるるに至った。それは日本心理学の第一の創始者元良勇次郎博士の心理学の重要な特色をなしている、東洋心理学への関心が全く認められないということであった。

松本博士にとってはゲンタルト心理学などは必ずしも理解し易くはなかつたようであるが、しかし著しい関心を示して一おう説かれており、特に精神分析学などは元来の博士の嗜好にむしろ合わないとも考えられるに拘らず、フロイトだけでなく、アドラー、ユングの心理学にもわたって一おうの紹介を試みている。またディルタイ、シュブランガー、シュテルンの心理学、心身相関に関するモルトン・プリンスの説などにも触れられている。それにも拘わらず、我国の心理学者の研究の中でも、われわれの立場から見れば注目すべきものが無視されているのである。

先づ、元良博士の心理学体系は敬意をもって紹介されている。しかし元良博士の世界的に注目された“東洋哲学における自我の観念”などは注意されていない。心理叢書中の、入谷智定氏の“禅の心理的研究”，“心理学及芸術の研究”中の、佐久間鼎氏の「基調的意識」の研究、千葉胤成氏の「天才」の論文にも現れているその固有意識の説、渡辺徹氏の“鎌田鵬の研究”，さらに黒田亮氏の“勘の研究”正統、並びに禅の心理学的研究、等は全く無視されているのである。

この点同じく昭和12年に刊行された野島忠太郎氏の“心理学発達史”とは好箇の対照をなしている。また前年（昭和11年）出版された城戸幡太郎氏の“心理学史”も日本、シナ、印度にもわたった優れた業績である。

東洋心理学への無関心は、博士の人格、臨床心理学等への関心の低いことにも通じている。変態心理学に属する初期の研究、福来友吉氏の“催眠心理学”と、速水滉氏の自動書記の研究とは一おうとりあげられているが、その後の心理叢書中の小熊虎之助氏の“ウィリアム・ジェームズと其思想”，同氏の“夢の心理”，“心霊現象の科学”，渡辺徹氏の“人格論”のごとき注目すべき著作も“心理学史”においてはとりあげられていない。

博士は京大教授在任中、京都絵画専門学校、美術学校の校長をも兼任したことがあり、画家との交際も広く、“絵画鑑賞の心理”“諸民族の芸術”等の著書のほか、絵画関係の論文も相当あり、日本画や東洋画に関するものも少くない。東洋思想に対する関心としては、東大の学生時代、井上哲次郎博士からインドの数論等の講義を聞いて興味を感じたと、自伝に書いているが、元良

博士と違って松本博士においては東洋の思想や宗教に関する関心は遂に発展しなかったようである。これは両博士の人がらの相違によるといってよいかもしれぬ。

5. 松本博士の日本心理学界への影響

初めにも述べたように松本博士は（東京）高師教授（6年）、京都帝国大学教授（7年）、東京帝国大学教授（13年）と心理学の教育並びに研究の中心の地位を歴任し、元良博士逝去後、約30年にわたって日本心理学界の指導者となり、日本心理学会長も昭和2年学会創立以来逝去まで16年間継続、また帝国学士院会員として、まさに日本心理学界の大御所的存在を続けた。元良博士の心理学がいろいろ含蓄をもったものであり、心理学体系の樹立の試みであったとしても、まだ科学性が十分でなく、日本における科学的心理学の基礎を築いた先駆者として、松本博士の功績は他に匹類の見られぬほど偉大である。

京都帝国大学文学部創設当時、博士京大在任7年間の学生15名中、千葉胤成、檜崎浅太郎、黒田源次、寺沢巖男、田中寛一の5文学博士、富田精の1医学博士を生んだということは、高師時代の優秀な学生が博士に従って京大に来たという事情もあるが、何といたっても松本博士の指導力を示すものである（千葉氏は西田幾多郎博士、黒田氏は石川日出鶴丸博士の影響ないし指導も受けてはいるが）。博士の指導を受けた人びとの話を聞けば、博士は、精神動作学—智能心理学の線になるが、問題のレパートリーをもっていて、学生たちにこれを与えて行かれたようである。弟子たちの中には一生その問題の線を続けたものもあるが、中にはむしろこれに対する自己批判から反対に近いものに転じたもののあることも興味深い。学生の中には博士の関心の領域になじまず、独自の道をとったものも、ないではなかったという。

田中寛一氏の人間工学、教育測定学、古賀行義氏の心理測定学などは、英国留学によって強化されたとはいえ、生涯を通じて松本博士の線を発展させている。檜崎浅太郎氏は精神力学から後、純粹心理学に興味を移し、千輪浩氏は精神作動の研究から本来の心理学を求めてゲンタルト心理学等の基礎心理学的なものに関心を転じ、今田恵氏などは宗教、ジェームズ、人格などに対する興味を基盤にあって、一時、松本博士の影響の下に智能心理学的なものに関心を示したということになるかもしれぬ。高木貞二氏のごときは、中学時代、元良博士の“心理学綱要”を読んで心理学への興味を刺激されたというが、東大では松本教授の指導を受け、リズム行動の研究の問題をもらい、ティッチェナーのところへ行っただけのも松本教授のすすめであったという。その後しばらく感覚の問題や山雀の選択行動のような基礎心理学に集中したが、その後多年、教育行政の活動に執筆、最後に能力開発研究所長という松本博士の本来の線に戻っている。

“精神的動作”や“智能心理学”でとりあげられている問題には現代においても関心の焦点になっている問題も少なくなく、松本心理学の遠見と先駆者性を示している。例えば、精神動作学の眼球運動の研究などは米、ソにおいても新しい研究を進展させており、また智能心理学の抜群智能の研究は創造性の問題に通じ、航空心理、人間工学、老年の研究等、いずれも新しい時代の背景において新たなる光を浴びている問題である。我国における応用心理学の著しい発達には松本博

士の力によるところ少しとしないのである。城戸幡太郎氏は“シンポジウム”では、松本博士の精神動作学に現代の行動科学の先駆を見ようとしておられたが、身心にわたる人を問題とした点、問題のダイナミックな捉え方をしている点など、相通ずるもののあることは否定できない。しかし人間関係科学の統合という根本的な性格においては何ととっても時代的相違があり、むしろわれわれの見解のように、大正初頭におけるゲシュタルト心理学、行動主義の擡頭に比する方が無理がないと思う。

松本博士の業績には深甚なる敬意を表しながらも、われわれとしては日本心理学の世界心理学界における位置と課題とを検討するために、松本心理学の盲点とその影響についても反省を怠ってはならないと思う。松本博士も指摘されたように、日本の心理学者は欧米の心理学に学ぶ熱意と機敏さにおいては世界無比であると思うが、その他面、模倣の安易に流れて独創性において欠ける点のあることは、南博氏も三四年前国際学会から帰って述べていたが、否むことができない。しかし大きさその他の恒常性の問題、感応の場の理論、図形残効の問題など、ゲシュタルト心理学の影響を受けた知覚領域の研究、最近においては言語学習の研究などにおいては、他国に劣らぬすぐれた組織的研究が進められている。欧米諸国の心理学界に問題を受けながらも、このような研究の組織的發展も、それなりに重要な意味をもつと思う。

松本心理学の盲点に連なるものとしては、我国心理学界の中心的な位置を占めてきた多くの人のびとの東洋心理学に対する無関心である。その代表的なものをあげれば、平凡社出版の“心理学事典”は世界にも誇るべき日本心理学者の共同作業であり、矢田部達郎氏の“心理学”，今田恵氏の“心理学史”など、まことに立派な記述であるが、問題は西洋の歴史上の哲学者の名前が何人か挙げられながら、東洋の心理学に全く触れていないということであり、このような事態に慣れたわが国の多くの心理学者には問題にされぬであろうが、ドイツのメツガー教授のような心ある世界人の目にとまるならば、著しく奇異の印象を与えるであろうと思う。

一方、生理心理学、薬物心理学、動物心理学、数学心理学などの領域において目覚ましい進展を示している米国心理学界においても、実存心理学が問題とされ、米国心理学会に哲学心理学の部門が生まれ、別に American Association of Humanistic Psychology が結成され、年会も開かれ、こういう傾向の雑誌も何種か刊行されているのである。この動きがまた日本の心理学界にも反響を呼ぶと思われるが、われわれとしては元良博士以来の東洋心理学、人格心理学の流れを忘れてはならぬと思う。

私としては日本心理学の重要な源流として松本心理学と並んで元良心理学を重視すべきことを力説したいのである。

松本博士の問題点としては、さらに日本心理学会長を終身職のごとく十数年続けたということも、米国心理学会の伝統などと著しい対照である。1892年、米国心理学会創立以来、会長は G.S. Hall, G.T. Ladd, W. James, J. Mc Keen Cattell 等々、一年任期で—G. Stanly Hall と William James は後に再度会長に選出されたが—今日まで続いてきているのである。松本博士が特立して

いたということ、文部省等との交渉が責任者が変らぬ方が有利であるというような事情もあったが、松本博士の逝去後も、ややもすれば、会長が東大に固定し易かったということは、世界的な視野で見るとき、また奇異な印象を与えらると思う。この意味で、日本心理学会の会長と理事長を区別し、会長は名誉的な職として毎年交代し、年大会において Presidential Address を行い、理事長はある年限その職に留まって学会の事務的な処理を総裁するというように、職務を分担して学会の開放性を高めるべきだという提議も、最近の日本心理学会理事会であったが、真剣に検討すべき問題である。元良博士に学ぶべきもう一点は、元良博士が東京大学出身でなくして東大教授になっているということである。日本の大学はややもすれば自己受精の不毛を来し易いが、従来の経緯によって見ると、東大などこそ率先して開放すべきであると思われる。この開放に対する一つの絶好の機会が空しく見送られた今日、さらに視野を新たにして良心的に元良博士の場合を宗とすることが要望されると思う。

参 考 文 献

- 千 輪 浩，精神作業に於ける疲労と練習，東京：心理学研究会，大正 6（1917）。
- 飯 沼 竜 遠，現代日本人の信仰，東京：心理学研究会，大正 7（1918）。
- 入 谷 智 定，禅の心理的研究，東京：心理学研究会，大正 9（1920）。
- 城戸幡太郎，心理学史（上），東京：日本評論社，昭和11（1936）。
- 古 賀 行 義，智能相関の研究，東京：心理学研究会，大正 7（1918）。
- 桑 田 芳 蔵，靈魂信仰と祖先崇拜，東京：心理学研究会，大正 5（1916）。
- 桑 田 芳 蔵（編），心理学及芸術の研究（上・下），松本亦太郎博士記念論文集，東京：改造社，昭和 6（1931）。
- 松本亦太郎，精神的動作，東京：六合館，大正 4（1915）。
- 松本亦太郎，実験心理学十講，東京：弘道館，大正 4（1915）。
- 松本亦太郎，渡り鳥日記，東京：実業之日本社，大正 6（1917）。
- 松本亦太郎（共著），書及び書方の研究，東京：心理学研究会，大正 8（1919）。
- 松本亦太郎，智能心理学，東京：改造社，大正14（1925）。
- 松本亦太郎，絵画鑑賞の心理，東京：岩波書店，大正15（1926）。
- 松本亦太郎，心理学史，東京：改造社，昭和12（1937）。
- 松本亦太郎，遊学行路の記，東京：第一公論社，昭和14（1939）。
- 松 尾 長 造，読書の心理的研究，東京：心理学研究会，大正 8（1919）。
- 村 瀬 雄 平，智能の遺伝，東京：心理学研究会，大正 6（1917）。
- （故）元良博士追悼學術講演会（編），元良博士と現代の心理学，東京：弘道館大正 2（1913）。
- 野島忠太郎，心理学発達史，東京：大都書房，昭和12（1937）。
- 小熊虎之助，ウィリアム・ジェームズと其思想，東京：心理学研究会，大正 8（1919）。
- 佐 久 間 鼎，国語のアクセント，東京：心理学研究会，大正 6（1917）。
- 高 木 貞 二，律的動作の研究，東京，心理学研究会，大正10（1921）。
- 富 田 清，左利と右利，東京：心理学研究会，大正 6（1917）。
- 渡 辺 徹，人格論，東京：精美堂，明治44（1911）。